（司会）

お待たせしました。続いての講演は、文部科学省大臣官房国際課国際協力企画室室長の松木秀彰様からご講演いただきます。演題は、「グローバル人材の育成に向けた国の取り組みについて」でございます。

松木さん、よろしくお願いいたします。

◎講演

「グローバル人材の育成に向けた国の取り組みについて」

文部科学省大臣官房国際課国際協力企画室室長　　松木　秀彰氏

皆さん、こんにちは。ただいま紹介にあずかりました、文部科学省国際課の国際協力企画室長をしております松木と申します。

本日、20 分程度お時間いただきまして、この国際バカロレアの推進についての国の取り組みについてご紹介をしたいというふうに思っております。

先ほど、長谷川先生からも既に詳しいお話があったところでございますけれども、文部科学省が現在進めております高大接続改革ですとか、学習指導要領見直し、アクティブ・ラーニングの導入とか、いろいろな教育改革について進めている前提となっている認識でございます。

今、向き合わなければならない我が国の状況でございますけれども、まず、グローバル化が劇的に進展をしているということでございます（資料ｐ２）。我が国の GDP の全体に占める割合が相対的に低下をしていて、特に皆さまご存知のとおり、中国の存在感が非常に大きくなっているということでございます。他方、我が国の労働力人口、我が国の経済を支えている労働力人口はといいますと、だんだん減っているということになっております。グローバル化がだんだん進展していく中で、労働力人口が減っていくと。それから技術、IT 関係の技術進展が最近目覚ましいんですけれども、これも非常に進歩していくと。これからの世の中、一体どうなっていくのかということが、非常に見通しができなくなっている。予測不可能な世の中になって来るというふうに認識しています。

次のスライドでございますけれども（資料ｐ３）、冒頭、教育長様からご紹介があったとおり、ある専門家の予測、これは衝撃的な内容でございますが、が出されております。現在の職業の多くは今後なくなっていくと。今後 10 から 20 年程度で 47％の仕事が自動化される可能性が高い。あるいは、子どもたちの 65％が大学卒業後、今、存在していない職業に就く。キャシー・デビットソン氏の予測がございます。技術が進展していって、今ある職業がどんどんなくなっていくと。そういった中で、子どもたちにどういったことを教えればいいん

だろうかというふうに考えるわけでございます。現在は、割と知識を覚えるということにかなり重点を置いた教育というものをやってきてるわけですけれども、それで果たしてよいのだろうかと。教える知識として、じゃあ何を教えておけばいいのか。それは、10 年後、20 年後に本当に役に立つのだろうかといったことが、非常に不透明になっているということになります。

こういった先を見通すことが難しい時代の中で、ではどうすればよいかということなんですけれども（資料ｐ４）、真の学ぶ力、これは課題解決能力と言い換えると分かりやすいと思いますけれども、知識を覚えるだけではなく、知識も重要なんですけれども、それをツールとして自ら課題を解決すると。たくましく生きていけるような力、課題解決能力をきちんと身につけさせることが、今後の教育で重要ではないかというふうに考え、いろいろな改革を進めているというのが、我々の取り組みとなります。

そういった中で、国際バカロレアという教育プログラムがございます。（資料ｐ５）これは、課題解決能力の育成とか、あと、今後グローバル化していく中でグローバル人材が求められるんですけれども、そのグローバル人材育成といったものにとって、非常に有効で完成度の高い教育プログラムでございます。これを、我が国、日本政府としては、積極的に導入していこうというふうに、今、頑張っているという状況でございます。こちら、国際バカロレア機構というジュネーブに本部がある国際機構が作っております。今は 140 以上の国・地域で 4,000 校で導入。かなり数が多いと。対象年齢ごとに、いろいろなプログラムありますけれども、特に高校レベルのディプロマ・プログラムといわれるものについては、国際的に通用する大学入学資格、IB 資格を取得可能ということになっております。例えば、日本の国際バカロレア校で何点取りましたと言ったら、その点数でもって、IB 生を受け入れている諸外国の大学については、学力試験は免除されると。この点数でもって入れてあげますよといったような、国際的に通用力のある資格を得ることができると、非常にメリットの大きいプログラムになっています。この IB 認定校等を 200 校まで拡大したいと。これを、いわゆる成長戦略といわれています、安倍政権になってから閣議決定いたしました日本再興戦略で盛り込み、「まち・ひと・しごと創生総合戦略」にもその目標を引き継いで、政府として今後も進めていくといったような流れになっています。

国際バカロレア導入の目的についてご説明したいと思います。（資料ｐ８）

まず、第一は何といってもグローバル人材の育成ということでございます。グローバル人材育成につきましては、文部科学省としてはいろいろな改革メニューを用意して進めているんですけれども、小学校・中学校段階、あるいは高校段階でも、英語教育を強化ということになっております。特に、現在、小学校５年生から英語教育を始めておりますけれども、これを小学校３年生から始

めるように年齢を引き下げるといったことも今後考えております。それから、高知西高校が採択されておりますが、スーパーグローバルハイスクールという高校段階のグローバル化を支援するプログラムもやっております。それから国際バカロレアとまいりまして、大学関係ですと留学生交流の推進や、それから、スーパーグローバル大学創成、大学の国際化を支援するプログラムと、様々なプログラムを通じて、グローバル人材の育成というものに力を入れているということでございます。

このIBの使命ですけれども、ここの赤字で書いてあるところ（資料ｐ９）、一番下です。人が持つ違いを違いとして理解し、自分と異なる人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人の育成を目指していると。これが一言で言うとグローバル人材のことだと。語学力も重要なんですが、それにもまして自他の違いですね。日本人とそれから外国人の違いとか、自分と相手、他者との違いをきちんと相互理解して対応することができる人の育成を目指しているというのがIBの使命でございます。こちらのIBラーナープロファイル（学習者像）と言いまして（資料ｐ10）、どういう子どもに育ってほしいというものを10項示しているものでございます。これをご覧いただくと分かりますとおり、知識も重要なんですがそれを使ってきちんと考える人、それからコミュニケーションもできる人、それからそういうナレッジ（知識）やスキル（能力）以外のところで、人格的な部分にもちゃんと力を入れていると。非常に全体バランスが取れていて完成度の高い学習者像を示しているということでございます。

こういった、優れた人材を育成するプログラムということなんですけれども、次のスライドでございますが（資料ｐ11）、こういった人材については産業界も今、求めていると。産業界もグローバル化の波にさらされている非常に最先端と言いますか、一番さらされているところではないかと思うんですけれども、これは平成25年６月に経団連が出された提言で、こういう「グローバル人材を育成するうえでIBディプロマ課程は非常に重要である」というふうな提言も出されているということでございます。

目的の２番目ですけれども（資料ｐ12）、この国際バカロレア資格といいますのは、国際的に通用する大学入学資格が得られるということで、生徒の進路選択肢を多様化するという効果がございます。外国の大学でも、国際バカロレアというものを点数で入学をさせるというところが多いんですけれども、実は後ほど紹介いたしますが、日本の大学でもIB入試といったものを導入する大学が徐々に増えているという状況でございます。そういった大学が増えてくると、国際バカロレア資格を取得した生徒さんは、国内と国外とのどちらに行くかというところで選択肢が増えるということで、非常にいい効果があると思っております。

これ、ちょっと細かい字ですけれども（資料ｐ13)、DP のカリキュラムというのがございます。細かくはちょっと説明いたしませんが、グループ科目と言われるこの上３分の１ぐらいに書いてあります、国語・外国語・社会・理科・数学・芸術ですね。この６つと、それからコアという特定の科目に限定しない横断的なものがございます。論文と知の理論。知の理論については、ちょっと後ほど説明いたしますが。あと、創造性・活動・奉仕と言われるものがございます。

どれぐらいのレベルのことをやっているのかという例なんですが(資料ｐ14)、歴史だとこういう穴埋め問題ではなく記述式となります。テーマ群がこれ６つあって、かける５で 30 の中から２つテーマを選んで記述式で解答しなさいと。かなり難しい問題ですけれども、この国際バカロレアプログラムを履修した方は、こういった問題が解けるようになるということでございます。これも、課題解決能力を磨くという教育の効果の表れということでございます。理系の科目の例ですと、化学ですね。こういった問題が出ると。(資料ｐ15)

次にまいりまして、TOK ですね（資料ｐ16)。セオリー・オブ・ナレッジ（知の理論)、コアの一つなんですけど、知識について、知識とは何かということを問うものでございます。あくまで分かりやすい例として、ちょっとイメージをつかんでいただくために挙げたものですけれども、例えば、数学でありますと「数学は発明なのか発見なのか」という問いですとか、「なぜ数学の公式は美しいのか」とかですね。こういうのって非常に答えが難しいというか、答えが一つではないという問題でございます。自然科学だと「科学の知識は時間とともにどう変化するのか」、それから「人文社会はそもそも学問なのか」というシビアな問いもありますけれども。歴史だと「歴史における事実って一体何だろう」（資料 p16)。その１個上は「バイアスが掛かっているんじゃないか、それをじゃあどう見極めるのか」といったようなこと。芸術でありますと美しさ、美ですね。美というものについては「それは客観的に存在するものか、主観的なものなのか」といったような問について、生徒がそれぞれ、これに限られないんですけれども、一つ選んで小論文の形にまとめたり、それに加えて最後プレゼンをするといったようなことになります。こういった複数の答えがあり得るものについて、きちんと人に説明できるように訓練をさせるというところが非常に面白いところでございまして、生徒さんはこういったものに通じてクリティカル・シンキングを養われると。歴史における事実というのは、もしかしたらバイアスが掛かっているんじゃないかとか、あるいはどういう資料に基づいてこの何百年も前の事実が、今、認定されているのかということを考えるようになると。そうすると、単純に頭に入れるだけではなくて、これは本当に正しいのかどうかと自分の頭で考えるようになるといったような、クリティカル・シンキングの育成に非常に効果があるといったようなものでございます。他方、

答えが複数あることは生徒は分かっておりますので、自分の考え方が絶対的に正しいというふうに思うことはなく、人の意見にもきちんと耳を傾けると。それが、結局、人の話もよく聞いて自分の違いを理解し、でも自分の主張はきちんと行うといったような、相互理解に長けた人材の育成をすることができるといったような、優れたプログラムになっているということでございます。

これは（資料 p17）海外の大学の国際バカロレアの点数の活用例ですが、キングス・カレッジ・ロンドンでは、35 点ないしは 34 点で学力はパスするといったような扱いになっていると。これはオックスフォードの例で（資料ｐ18)、もうちょっと点数が高くなります。38 から 40。アメリカでは（資料ｐ19）SAT（Scholastic Assessment Test）といった共通試験もありますけれども、それに加えて IB が活用されていると。これは（資料 p20)、ハーバードの例で、赤字のところで SAT に加えてですけれども、この国際バカロレアを含むプログラムの習得を推奨しますと書いてあります。これは（資料ｐ21)、軒並み国際バカロレアの習得した人の方が合格率が高いと。これは（資料 p22)、国内の大学で入試を受け入れているものの一覧でございます。残念ながら、ここにはちょっと高知大学、挙がってないんですけれども、今後検討いただけるというふうに伺っておりますので。ということで。

目的の３つ目は波及効果です（資料ｐ23)。高校段階と大学の両方について、よい波及効果がこの国際バカロレアでもたらされるだろうと考えています。この IB 教育の特徴ですが（資料ｐ24)、インタラクティブな授業ということで、これアクティブ・ラーニングのことですね。相方向でやり取りをする、生徒間の間でもよく話し合うといったようなことで頭にきちんと知識が入るということでございます。スキルも身につくと。課題発見、解決能力も身につく、コミュニケーション力も身につくという特徴になっております。

教育再生実行会議においても（資料ｐ25)、大学に対しては入学者選抜で積極的に活用してくださいと。国際バカロレアを活用してくださいと言っております。そういったこともあって、徐々に活用する大学が今後増えているということでございます。こういった形で、これ世界共通の資格ですので、海外の IB 卒業生が日本に来るといったようなことも期待されると。逆に、国内から海外に飛び立つということも期待されるということでございます。（資料ｐ26）

これを広めるために行っている文部科学省の取り組みですけれども、第一に日本語 DP（資料ｐ28）というものでございます。このディプロマ・プログラムというのは、スイスのジュネーブに本部を置く国際機関が開発したもので、当初はやはり英語とフランス語とスペイン語でしか授業と試験は実施しないという形だったんですけれども、日本で普及を図るために、日本語でもできるというふうにいたしました。そのための予算も確保して、今、現在、拡大・拡張を図っているというところでございます。日本語化できているのは、対象科目は、

日本の高校で通常教えられているものは全てカバーできるようにということで日本語化をしています。学習指導要領との対応関係についても整理いたしました。（資料 p29）普通の１条校と言われる通常の高校が、同時に国際バカロレア校になるということは可能でございまして、そういった学校のためにこの対応関係を整理して、生徒さんの負担が、国際バカロレアコースに入ったがために余計に単位数を習得しないといけない、といったような負担ができるだけなくなるようにといったような工夫をさせていただきました。

それから、この国際バカロレアコースで教える先生の養成のための取り組みとして（資料 p30）、ワークショップの開催や、外国人を教員として雇う際の教員免許状の授与とか、あとは教員養成コースなどの取り組みも力を入れているところです。

また、国際バカロレアとは何かということをまだ正直十分浸透しているかどうかというところがあるので（資料ｐ31）、この周知活動にも力を入れております。特に、この２番目で最近国際バカロレアの手引きというものを作成しております。この URL で、無料でダウンロードできますので、興味ある方はご参照いただければと思います。

200 校という数値目標はございますが、当初の 16 校から候補校まで入れて、38 校と増えてはいますが、まだまだ数が足りないところでございます。今後、高知県様にも頑張っていただいて、できるだけ数を増やしていければなというふうに思っております。（資料ｐ32）

ちょっと駆け足でございましたが、私からの説明は以上で終わります。ありがとうございました。

（司会）

ありがとうございました。

では、これより 10 分間の休憩に入らせていただきます。パネルディスカッションは、ですので２時 22 分からの開始ということになります。それまでには、お席の方にお戻りいただけますようにお願いいたします。

それでは、休憩を取らせていただきます。